



苫小牧港開港50周年記念 後援事業

苫小牧市博物館 苫小牧港開港50周年記念企画展

「夢を形に～砂浜と原野にいだんだ時代～」

会 期 平成25年10月12日(土)～11月24日(日)
会 場 苫小牧市美術博物館 展示室
主 催 苫小牧市美術博物館
後 援 北海道開発局室蘭開発建設部 苫小牧港湾事務所 苫小牧港管理組合
苫小牧港開港50周年記念事業実行委員会
協 力 苫小牧港開発株式会社 苫小牧埠頭株式会社 苫小牧信用金庫
株式会社志方写真工芸社 一般社団法人日本埋立浚渫協会

開催趣旨

半世紀前、日本最初の内陸掘込式港湾である苫小牧港は先人の非凡な発想と努力によって完成した。一帯が砂浜である苫小牧の海岸は、砂浜に港をつくることはできないという先入観念とともに採算性なども問題視され、大正時代の構想から40年もの間足踏みが続いた。そうした状況下にあっても自治体や企業、住民の熱望が絶えることはなく、1951(昭和26)年起工式が行われ砂浜を掘り込む港造りが始まった。1963(昭和38)年、国内初の掘込式港湾として供用が開始され、その技術は以後鹿島新港、新潟東港、福井港などに受け継がれていった。本展示会では江戸時代から北海道から本州へ物資を運ぶ役割を担っていた当地方の歴史を導入部とし、以降内陸を掘り込んでいく過程をドキュメントとして撮影した写真集「砂浜と原野にいだんだ」のプリント写真や地図、浚渫船模型などから苫小牧港が形成されるまでを紹介する。併せて現在の港の役割を知る資料や港をテーマとした絵画作品を展示して市民と歩んだ港の50年を振り返る。

本展示会は50年前の苫小牧港開港を記念して開催する。展示は6項目から構成される。

I 港湾建設前史

現在の苫小牧市勇払地区は、江戸時代から交通、交易の要衝であった。勇払はアイヌ語で「その入口」を意味し、河川を経由して太平洋岸と日本海岸を結ぶ枢要の地であった。内陸で生産されたサケや鹿革などの産物は丸木舟を使用して搬送し、勇払の海岸から北前船で本州へ運ばれた。展示では当館所蔵の北海道指定文化財「アイヌの丸木舟」模型のほか、新ひだか町門別稲荷神社所蔵の船絵馬を展示し、当地方の江戸時代の交通・交易の様子を紹介する。

II 港湾築設

1924(大正13)年、留萌築港事務所長に就いていた林千秋が発表した「勇払築港論」は、北海道から産出する石炭の積み出しは勇払に港を建設して行うべきであり、砂の移動を制御できれば築港は可能とした構想であった。当時はこの計画は膨大すぎ、手をつけることができなかったが、その後の方向性を示す指針となった。展示では市立中央図書館の所蔵する「勇払築港論」や地方紙などの文書資料から港湾建設の出発点となった林の論拠を検証する。

III 起工

大正から昭和にかけて、王子製紙の木材陸揚げ港計画のほか住民による勇払原野の開発と港の築設についての陳情が続く、勇払では1943(昭和18)年大日本再生製紙の操業開始もあり、勇払の漁港計画は薄れ、次第に苫小牧工業港案に包含されるようになる。1951(昭和26)年8月には盛大な「苫小牧港起工式」が行われた。展示は戦時中の「石狩並勇払工業港計画図」や「苫小牧工業港修築計画図」など当時の計画図を中心に行う。

IV 開港

一帯が砂浜である苫小牧の海岸は、砂浜に港をつくることはできないという先入観念とともに採算性なども問題視され、大正時代の構想から40年もの間足踏みが続いた。1951(昭和26)年の起工式の後、1954(昭和29)年には世界初のアイソトープ使用の漂砂追跡試験が行われ、砂浜の掘り込みを確認するデータを得ることができ、3年後には現在の苫小牧工業港の形が決定する。内陸を掘り込む浚渫船が稼働し、1963(昭和38)年4月待望の入船式を迎える。展示では開港までの過程を撮影した写真集「砂浜と原野にいどんで」のプリント写真を中心に浚渫船の模型などを用いて開港までの様子を視覚的に体験する。

V 現在と未来の苫小牧港

1963(昭和38)年に苫小牧港が「国の利害に重大な関係を持つ港」として重要港湾に指定され、供用開始となってからは工業港としての整備が充実して多種多様の企業が進出し始めた。展示では現在の港の役割とともに各種企業をパネルや製品を用いて紹介する。

VI 港を題材とした絵画

美術館の設置初年度にあたる展示会として、当館および市内企業が所蔵する苫小牧港を題材とする絵画作品を展示する。

本事業は「財団法人 日本海事科学振興財団 船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」の支援を受け実施する。